新米漁師の奮闘記
～漁師の息子が漁師になって～

岩井富浦漁業協同組合
川﨑　諒

１．地域の概要

私の住んでいる南房総市は房総半島南端に位置し、西側には東京湾、東側と南側には太平洋と三方を海に囲まれ、その海岸線は南房総国定公園に指定されている（図１）。気候は沖合を流れる黒潮の影響により、冬暖かく、夏涼しい海洋性の温暖な気候であり、その環境を利用した漁業、農業、酪農が盛んで、私の生まれ育った岩井地区は、冬から初夏にかけてはビワやミカンなどの果実や花、夏には海水浴に訪れる観光客で賑わい、民宿も多く営まれている。

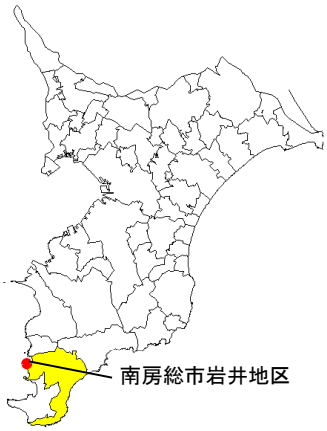

図１　南房総市岩井地区の位置

２．漁業の概要

私の所属する岩井富浦漁業協同組合（以下、「岩井富浦漁協」という。）は、平成 27 年 1 月に岩井漁協と富浦町漁協が合併し発足した。正組合員 229 人、准組合員 323 人で構成されている。定置網、一本釣り、刺網、あまなどの沿岸漁業のほか、沖合漁業のさば・さんま棒受網も営まれており、平成 28 年の水揚量は 1,937 トン、水揚金額は 4 億 8 千万円である。そのなかで、私の所属する岩井支所には、組合員が 119 人、准組合員が 40 人おり、基幹となる定置網の他に、磯根等浅場の魚介類を対象にしたあま、刺網、曳縄や、深場の魚介類を対象にした底刺網、かご漁業、その他海藻類などの養殖など様々な漁業が営まれている地域である。

また館山自動車道が平成 19 年 7 月に全線開通したことで都市部からのアクセスが良くなったことから、漁協では訪れる観光客をターゲットにした漁協直営食堂「網納屋」と「おさかな倶楽部」、直売所の「大漁市場」での直販事業や観光地曳網や釣堀などの観光関連事業にも力を入れており、平成 28 年度の来客数は 3 店舗で 23 万 4 千人、売上高 3 億 1 千万円となっている。

３．岩井で漁師になるまで

私の実家は祖父の代から岩井地区で漁業を営んでおり、父は、あま、刺網、曳縄、見突き、たこかご、海藻類養殖、ばいかごなど様々な漁業で生計を立てている。また、父は平成 22 年から漁業体験の交流として、一般の方に「たこかご」のオーナーになってもらい、獲れたタコを茹でて提供する「たこマンション」という取組を始め、平成 27 年からは、漁協に協力してばい種苗の試験放流や産卵礁の設置などの資源管理に関する取組を積極的に行って

いる。そんな環境の中、私は小さいころから海や魚に興味があり、休日には海に潜ったり、父の船で釣りをしたりしていた。私は特に釣りが好きで、釣り具メーカー主催のルアーや餌釣り大会に頻繁に出場しては、その多くで優勝するほどの腕前であった（図２）。

図２　過去の釣り大会の優勝トロフィー

進路について、両親は漁師になることを勧めず、収入の安定した民間企業に就職することを望んでいた。そのため、高校は商業科に進学し、卒業後は大手造船会社に就職した。仕事内容は海のことに直接関わらない事務職であり、１年半働くうちにだんだんと海や漁業への思いが募っていった。そして、どうしても漁師になりたくなり、実家に帰り「漁師になる」と父に伝えると、父は何も言わず反対はしなかった。父と同じ船に乗り、手伝いをするという選択もあったが、自分で魚を獲りたいとの思いが強かったので、自分一人で頑張って漁をすることを決めた。

漁師となり何年かして、私が「あの時なぜ漁師になることを反対しなかったのか」と父に尋ねると、父から「人に頼らず自ら考え抜いて行動し、努力する人間だとわかっていたから何も言わなかった」と言われた。私のことを信頼してくれている父に、一人前の漁師と認められるよう更に努力しようと思った。

４．研究・実践活動状況及び成果

（１）新米漁師の奮闘

岩井地区では、定置網以外にブリやスズキ、マアジなどの活魚を水揚する人は少なく、比較的活魚の値段が高い（表１）。そのため、活魚をメインに水揚すれば水揚額も上がるのではないかと考えた。そこで、季節や来遊する魚に合わせて様々な漁業をする父の操業スタイルを参考にしながら、腕に自信のある釣り漁業を主体に他の漁業を組み合わせてた操業スケジュールを考え（図３）、平成 27 年 11 月に実家に帰り、来年からの本格的な着業を見据え、父の所有する 1.5 トン型の船外機船を借りて、次の取組を試みた。

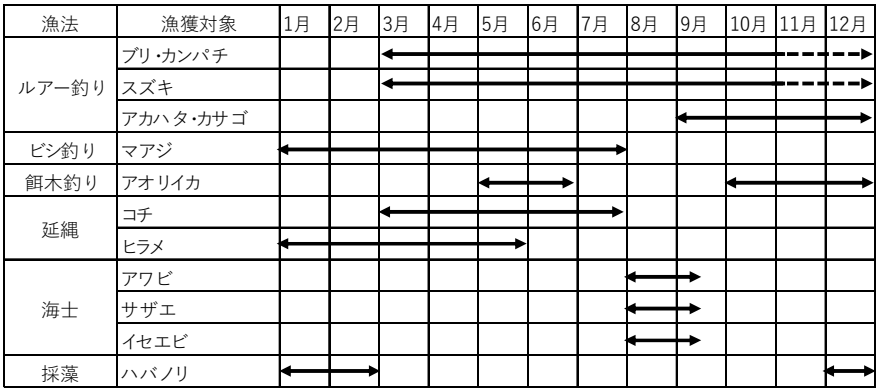

図３　複数漁業を組み合わせた操業スケジュール

①ルアー釣り

まずは腕に自信のあったルアー釣りで、青物（ブリ、カンパチ）を活魚で水揚することを考えた。しかし、漁場やルアーの選択がうまくいかず、思った水揚量が得られなかった。そこで、岩井はもちろん周辺地区の漁業者から漁況の情報を集め、漁場を探し、漁獲した魚に吐かせた餌を参考にルアーの選択（図４）をしたところ、青物やスズキの水揚量が増えた。青物の獲れない時期にはアカハタやカサゴも漁獲した。

漁獲物の単価は活魚と鮮魚で大きく異なるので（表１）、漁獲したすべての魚種を活魚で水揚するために、魚体にキズをつけないよう、結び目がないゴム製のネットを導入し（図５）、針をはずす際も魚体に触れないよう特殊な治具を用いた（図６）。そのため魚の状態は非常によく、初夏の旬の時期のスズキは 5,000 円/kg近い金額で扱われたこともあった。しかし、ルアーだけでは思った水揚が出来ない時期も多かった。

表１　岩井支所における鮮魚と活魚の単価例
（平成 23～24 年の平均値）

魚種名	鮮魚単価(円/kg)	活魚単価(円/kg)
ブリ	275	485
カンパチ	549	1, 074
スズキ	292	763
アオリイカ	913	1, 536
コチ	542	1, 812
ヒラメ	744	1, 352
マアジ	558	※マアジの活魚の扱いは数件

図４　魚に吐かせた餌(上)に合わせたルアー(下)

図５　魚を傷つけないラバーネット

図６　魚に触れずに針をはずす治具

②ビシ釣り

次に、岩井地区では活魚としての扱いの少ないマアジを、天秤にコマセかごと仕掛けを付けたビシ釣で狙った（図７）。しかし、カワハギやフグなどの餌取りが先に集まり、マアジを思うように漁獲できなかった。試行錯誤の末、コマセを市販のアミエビから、岩井の定置網で漁獲された新鮮ないわしを用い、頭部は包丁で“たたき”に、身と骨は軽くすり潰したものを混ぜ合わせた“特製いわしミンチ”に変えた

図７　ビシ釣の仕掛け

ところ、餌取りが減り、マアジを 2 倍近く効率的に漁獲できるようになった。

③餌木釣り

岩井地区ではアオリイカを専門に狙う漁師は少ない中で、餌木を使ってアオリイカも漁獲した。アオリイカは、釣れる時期は限られるが、単価がよく、特に、他の漁獲物が少ない晩秋には貴重な収入となるが、キズが付きやすく、傷つくと単価が大きく下がるので、ゴム製のネットで特に丁寧に扱った。

餌木を使ったアオリイカ釣りは昔から得意で、地元を離れて近隣の地区でもたくさん釣っていたので、他地区の漁師にも羨ましがられるほどであった。そのことが縁で他地区の漁師とも情報交換をする仲になり、今も連絡を取り合っている。

④延縄

さらに、岩井地区ではあまり行われていない延縄で、活魚単価の高いコチやヒラメを狙うことにした。コチやヒラメはルアーでも漁獲できるが、延縄は針数も多く効率が良いため、活餌が入手しやすい時期（1～7 月）に行った。何度も試行錯誤しながら、枝糸の長さは活餌の動きがよくなる 2m が最適とわかった。また、使用する針も検討し、針の軸に対して針先の角度が緩い方（図８、左側）が、餌付けの手返しが早いことが分かった。

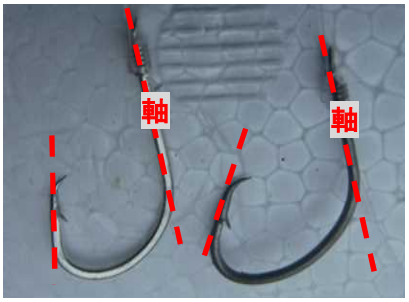

図８　延縄の針（左）

⑤その他

魚が獲れない時期である冬季には、海岸を歩き回り、よい磯を探してハバノリを採取し、また、平成 29 年からは、本格的にあま漁業にも挑戦し、アワビ、サザエ、イセエビも漁獲している。

（２）“育てて増やす”意識

様々な漁業を実践する中で、あま漁業にも参入したが、小さい頃潜っていた磯根と明らかに環境が変わっていた。昔は岩肌が見えないほど生えていたアラメ、カジメやモクが、今はごく浅場と、一部の磯にしか生えておらず、アワビが見当たらなくなっていた。あまの先輩たちに話を聞くと、ここ数年で急激に藻場が消失しており、平成 27 年から、水産総合研究センター、館山水産事務所（以下、「水総研」、「水産事務所」という。）と協力して藻場の調査と回復の取組を行っていることを知った。これまでの調査で、消失の原因の一つは、ガンガゼやアイゴなどによる食害であることがわかってきた。そこで、平成 29 年から私も、磯根の資源を維持、回復するために、先輩たちと一緒にアワビの種苗放流や藻場回復の取組に参加している。

①種苗放流と藻場回復の取組

今年から、水総研、水産事務所と協力し、アワビ種苗の放流にも参加している（図９）。藻場の消失は著しいが、その中でも海藻の繁茂している場所を選び、稚貝を放流した。今後は、年に数回、稚貝の測定、藻場状況の変化を調査し、成長・生残を追跡していく計画であ

る。

また、藻場消失の原因の一つであるガンガゼの駆除について、これまで私は、船の操船を行う「舵子（かじこ）」としての協力であったが、今度は先輩たちと一緒に潜り、実際に駆除を行うこととしている。一番すごい先輩は、1 回で 1000 個近く駆除したそうだが、私も負けじと頑張りたい。

図９　試験放流するアワビ種苗

そして、冬季には、アラメ・カジメの幼体をロープやブロックにつけて、周辺漁場に移植する取組も実施する。アラメ・カジメが増えれば、アワビがたくさんいた海に戻ってくれるだろう。

②アオリイカの産卵礁の設置

アオリイカを釣っていて気づいたが、アオリイカは毎年同じ時期に同じ漁場で漁獲される。なぜそのような行動をとるのか気になり、調べたところ、親イカは産卵のため春になると浅場に集まること、ふ化した稚イカはエサとなる小魚やエビを食べて成長し、やがて晩秋から餌木で漁獲されることがわかった。岩井地区の先輩たちは、アオリイカ資源の増大と、アイゴなどの海藻を食べる魚類から藻場を守るために、水総研、水産事務所と協力して、平成 28 年からアオリイカの産卵礁を漁場に投入している。産卵礁は、市内の山中に豊富に生えているシイやカシの枝を使い、葉をつけた状態で束ねて、磯根の縁やクマに投入している。私も平成 29 年からこの取組に参加した。先輩たちはこれまでの経験から 5 月に水深 7～8m の小型定置網の土俵の周辺に投入したが、私は、アオリイカがよく釣れるもう少し岸よりの水深 5m 前後の砂地に投入した（図１０）。1 か月後に確認したところ、先輩たちの産卵礁にはたくさんの卵が産み付けられたが、私の投入した産卵礁には卵を産んでくれなかった（図１１）。先輩たちに聞くと、「アオリイカはエサを取る場所と卵を産み付

図１０　アオリイカ産卵礁設置の様子

図１１　アオリイカの卵が産み付けられた先輩たちの産卵礁（左）と私の投入した産卵礁（右）

ける場所が異なるからだ」といわれた。その時、漁師としての経験の差を大いに感じた。私もただ漁をするだけでなく、様々な生物の行動や自然現象にもよく気を付けて観察しなければならないと感じた。来年は、今年の結果を踏まえて、先輩たちとよく相談して投入する場所を決めようと思った。

５．波及効果

これまで岩井地区では、定置網や刺網の魚が多く、釣りの魚は限られた時期の曳縄によるカツオなどで、丁寧に扱われた活魚は少なかった。ルアー釣り、ビシ釣り等で活魚の水揚を積極的に増やした結果、漁獲の多い月の私の水揚量は、ブリは 1,500 kg以上、スズキは 600 kg以上となった（図１２）。また、大型定置網を含む岩井地区全体の活魚水揚量に対する私の水揚割合は、スズキでは 35%、マアジでは 45%、アオリイカでは 50%、カサゴでは 76%、アカハタでは 100%近くを占め（図１３）、これまで活魚の水揚が少なかった岩井地区に貢献できたのではないかと思っている。活魚が増えたことで、地元の飲食店や民宿での取扱いも増え、観光客にも大変美味しいと喜ばれている。

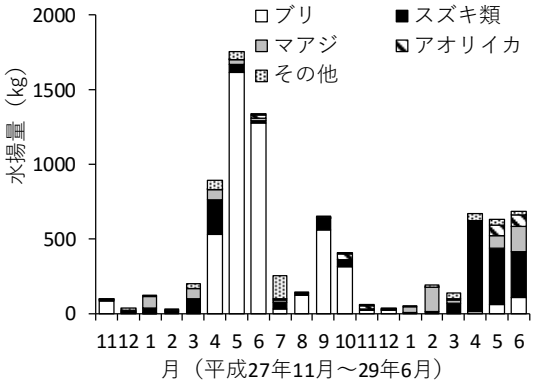

図１２　釣り漁業による水揚量
（主にルアー釣りによる）

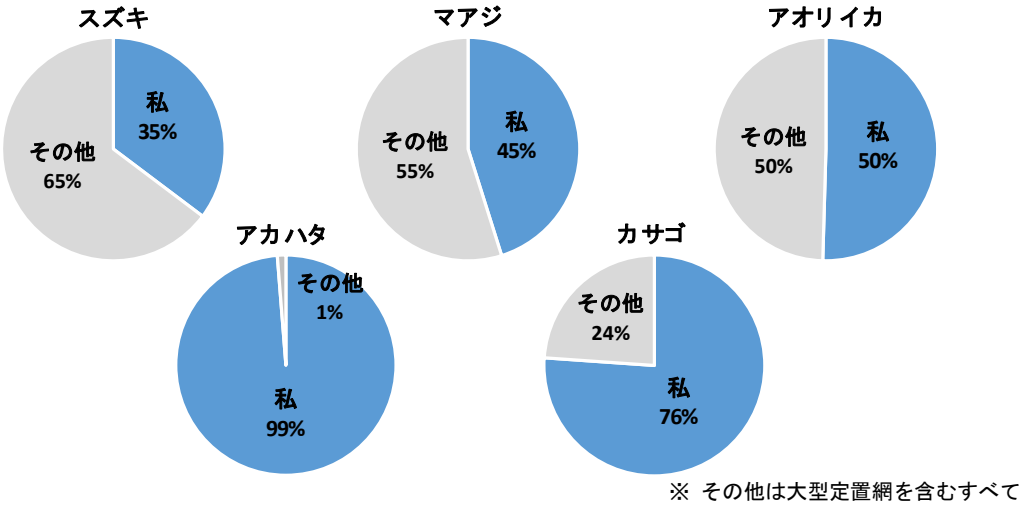

図１３　岩井地区全体の活魚水揚量に占める私の水揚割合（2017 年 6 月～9 月集計）

さらに、上質な活魚を自営食堂「網納屋」や直売所「大漁市場」へも提供できるようになり、大漁市場の水槽で元気いっぱいに泳いでいる私の釣った魚たちは、観光で訪れた子供たちの人気者である。また現在は、徐々にではあるが買受人からも評価されつつある。

アオリイカの産卵礁の設置については、近隣の漁協の 2 つの漁業者グループが興味を持ち、平成 29 年春から設置が行われた。さらに他の地域でも要望があるようで、今後、その

取り組みが波及しアオリイカがたくさん育つことを望んでいる。

また、県内で漁師自身がガンガゼの駆除の取組を始めたのは岩井地区が初めてであり、現在は隣の地区でも検討されている。藻場回復への漁師の関心は高く、あま漁業に若手が新しく加わったことで、これらの藻場回復の取組が加速すると考えている。

６．今後の課題や計画と問題点

（１）営漁計画

今後も、大好きな釣りで勝負したいと思っているが、これまでの操業スケジュールでは、どうしても秋から冬にかけて対象魚種が少なくなり水揚が減少する問題を抱えている。その時期に何を釣るかを改めて考えた結果、新しい対象魚種を加え、色々な釣りにチャレンジできるよう、父から借りている漁船よりも大きい船を造ることを決意し、現在、釣り漁業を中心とする私の漁業スタイルに合わせた５トン未満の小型漁船を建造中である（図１４）。来年１月には完成する予定であり、今後は新船を使い、これまでの船外機船では行けなかった漁場へ行き、先輩たちや近隣の漁師仲間に様々な漁法を教わりながら、キンメダイやタチウオ釣り、カツオの曳縄やアマダイの延縄を始めることで収入の安定化を図りたいと思う（図１５）。また、釣り漁業は、対象魚種の資源の変動や、海況条件による来遊の有無に大きな影響を受ける。そのため、水総研の発行している漁海況旬報の漁況予測や、関東・東海海況速報をはじめ、様々な情報を収集し、価格動向も併せ魚種を選択し、効率よく漁ができるようになりたい。

図１４　建造中の新船

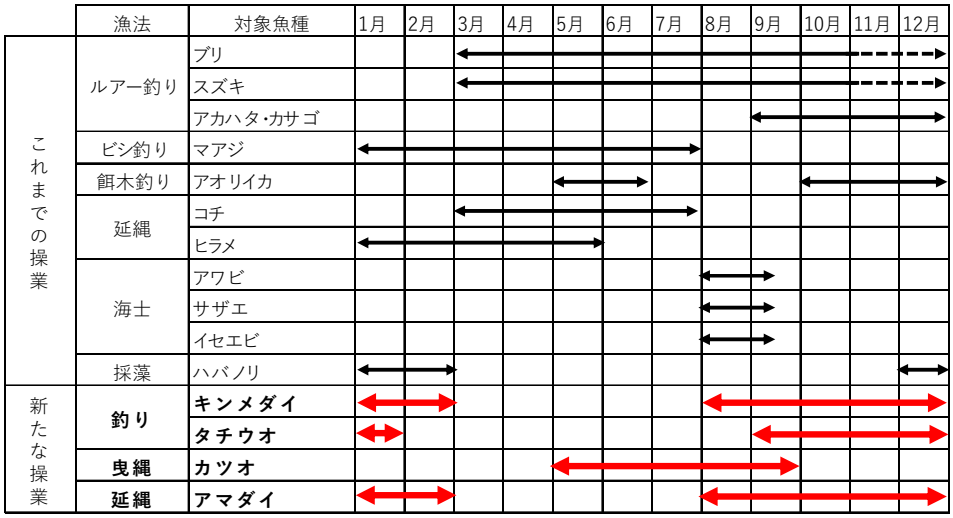

図１５　水揚の少ない時期を補った新たな操業スケジュール

（２）磯根資源

一人前の漁師として安定的な収入を得るためには、資源変動や来遊の有無に左右されづらい、地先の資源を増やし利用する取組も重要と考えている。そのためには、磯根を守り、資源を増やすアオリイカの産卵礁の設置に加え、藻場の食害生物であるウニ類を除去し、食用となるムラサキウニなどは実入りを良くするための肥育の取組に挑戦したり、磯根漁業で安定した漁獲を確保するため、藻場回復に向けた取組に力を入れていこうと思っている。

（３）最後に

岩井地区の大型定置網には、私と同じように海や漁業が好きな若い人が数年前から着業し始めている。彼らは定置網の従業員ではあるが、定置網の休日には定年後も岩井で漁師を続けていけるよう、今から小型船漁業への着業準備として、船の購入や漁場の下見、技術習得のために海に出ている。その姿勢と熱意が認められて昨年、正組合員になった人もいる。このようなやる気のある若い漁師たちと一緒に、岩井地区の漁業を引っ張っていきたい。

まずは、私が行ってきた魚の扱いを丁寧にする活魚の取組を周囲の人たちに知ってもらい、若い人を中心に「今までのままでいい」という意識を少しでも変えて、岩井地区の漁業、ひいては漁村の活性化につなげられるよう、切磋琢磨しながら頑張っていきたい。

私は釣りが大好きなので、これからも活魚水揚にこだわって、釣りのナンバー１を目指していく。